

TS転生したらラスボス
扱いされた~Re~

銀髪こそ至高である

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TS転生をした主人公は順応するためにロールプレイという狂気的な手段を取った。結果的に、確固たる地位や実力を手にすることに成功した。ただし、絶望的なまでの退屈と尾ひれの付いた噂が付いて回るようになってしまった。

『TS転生したらラスボス扱いされた』のリメイクです。設定はほとんど同じですが、物語はだいぶ変わります。旧版最大の相違点は転生者が主人公一人だけだということですね。

目次

第4話	第3話	第2話	第1話
21	15	9	1

第1話

日本とアメリカの中間地点の海上に建造された人工島。人類が魔術の存在を認め、研究しだしてから30年。この場所は適性のある人間たちの魔術の学び舎であり、研究所でもあり、そして同時に魔術師を閉じ込めておく檻でもある。ただし、扱いは各国が必要以上に干渉できない、独立した一つの国と言えるだろう。

人口は約45万人。人口の半分が学生であり、島の平均年齢は35歳とかなり若い。東西南北に配置された4基の超大型浮体式構造物と、それらを連結する特殊な建造物によつて構成されている。

そんな島では現在とある事件が起きていた。

「貴様ら魔術師は人間ではない！我々は神の教えの下、貴様たちを狩りつくす!!!」
魔術師の存在を目の敵にしている団体は世界に数多く存在する。その中の一つ、『魔女狩り』と呼ばれるテロリストたちが、上陸したのだ。

港で起こった騒ぎに島の治安維持部隊である『黒猫』が駆け付けるまでの数分間。周辺にいた人間は、目の前の脅威に怯えていた。この島の住民は大半が魔術師ではあるものの、別に戦いに慣れていないというわけではない。学生たちは、魔術を使った決闘を

行っているため、ある程度戦えるがそれでも実際に銃を向けられて平気な人間は多くない。銃声と悲鳴。硝煙と鉄の匂い。死臭と焼死体の残り香、そして狂信者の雄叫び。それらから目を背けた島民が目にしたのは、闇だった。まるで生き物のように流動する闇は触手のように浮かび上がり、上陸していたテロリストを根こそぎ吹き飛ばした。

「あ、あれは……まさか……あの方は?」

そこにいたのは、一人の少女だった。肩まである黒髪は、常に濡れそぼっているかの様に艶やかだ。蒼眼は妖艶に輝いており色香を感じさせる。身体は細く、四肢の先までスラリと伸びていた。道を歩けば間違いなく、百人が百人振り返る美少女だ。しかし、その瞳にその場にいた者たちは例外なく恐怖を抱いた。少女は空っぽの目つきで彼方を眺めている。その姿からはまるで生気が感じられない。間違いなく生きているはずなのにまるで生を感じさせない。異様に精巧な人形を目の前にしたような不安と違和感がある。

色々な感情がごちゃごちゃに混ざり合っているせいでまるで灰色の空洞だけが広がっているように見えてしまう。

「散れ」

少女が一言。その瞬間、闇で形成された触手が薙いだ。四方八方に、テロリストたちは吹き飛ばされ、空中でその五体を散らせる。血の雨が港に降り注ぐ。そんな中、少女

の周囲は不可視の傘でもあるかのように雨をはじいていた。

「おのれええええええ!!!!怪物があああああああ!!!!」

僅かな生き残りから放たれた殺気にほとんど反射的に反応した少女は真横に飛んだ。そのコンマ数秒後、数発の銃声とともに先程まで立っていた場所に鉛玉が叩き込まれる。加えて、胴体があつた部分を数発の弾丸が通過した。恐らくは行動を制限させるために足を狙った上で確実に殺すために銃弾を放った。殺気に反応しなければ両膝を撃ち抜かれ、同時に胴体も撃ち抜かれていたであろう。よく訓練されている兵隊だなど他人事のように少女は思う。

思考を巡らせながら、男たちは機関銃を少女に向ける。

無数の弾丸が少女を狙うが、すべてが少女の目の前で停止する。まるで、見えない壁に阻まれるかのように。

「返すよ」

パチン————中指と親指が音を奏でる、瞬間。銃弾は、恐るべき正確さでテロリストたちを蹂躪した。

テロリストたちと同時に島に来ていた少年、楨原十六夜はその少女について港で出会った住民に疑問を投げかけた。

それに対して、中年の男性が答えた。

「あれは……あの人はこの島に君臨する五芒星の一人だ」

曰く、この島には学生間で行われる決闘システムや魔術に関する研究を発表するシステムがあり、それらのシステムで残した功績によってポイントが与えられる。このポイントを上限まで溜め、理事会からの承認を受けた上位5人を五芒星と呼び、彼らは島の運営を行っている上層部に干渉を許された、この島の実質的な管理者らしい。

「彼女の名は雨空雫。五芒星の中でも黒い噂が絶えない人物であり、そして冷血残忍なこの島の最強の女王だ」

衝撃的な出会いを果たした数週間後、十六夜は最大の危機に瀕していた。

「……これより審問会を開始する。榎原十六夜、『昨夜未明、南西地区をランニング中の学生、鴨崎貫を炎熱魔術で襲撃。重傷を負わせ逃亡した』間違いはないか」

この島を代表するリーグレット・フォールデインは重々しく問い質す。この島の管理を行う理事会や島の重要事業を手掛ける上位企業の代表達が集う中、全員の視線が集中

する審問席で、少年は声を震わせながら否定する。

「ぼ、僕はやっていません」

「だが防犯カメラには君の姿が映っている。動かぬ証拠だと思うがね」

少年は殺人未遂の容疑を掛けられていたのだ。もちろん、彼はそんなことを行つてはいない。しかし、ありえない速度で連行され審問会に主席している。

出来レースだ。誰かが自分を嵌めたと少年は確信したが、状況を打破する糸口が未だに見えない。

そこからスクリーン上に状況証拠が積み上げられていく。島に来たばかりの少年は知る由もないが、このレベルの事件で理事会が出張ることはあり得ない。明らかに裏がある事件だが、混乱する少年にもっともらしい反論は出てこなかった。

「失礼しまーす」

けたたましい音が反響し、乱暴に扉が開かれる。そして鈴の鳴るような声色がすべての鼓膜を犯した。

そこに立っていたのは一人の少女だった。黒い髪を靡かせ審問席まで階段を下る。

「やあやあ、理事会並びに上位企業の諸君。茶番劇はそろそろ終わったかな？」

全員の視線が集中する審問席の少女は不敵に笑った。いつもと同じように、全てを嘲笑うが如く。

リーグレットが目を細める。

「何の用だ。雨空雫。ここは厳正なる審問会だ。五芒星とはいえこのような暴挙が通ると思うな」

「暴挙？審問会？笑わせないでくれよ。リーグ。この出来レースのどこが厳正なのかな？」

「……………」

「昨晚起こた事件の審問会を執り行うことも異例だけど、何よりも証拠が揃いすぎている。何より、島の運営に差し障るものでない場合、裁くのは自治委員会の仕事だ。彼らの裁量を超える場合は五芒星が裁く。『理事会』とはいえこの島の基本的な運営権は五芒星にある。暴挙はどっちだ？」

静まり返った室内で二人は視線を交錯させる。両者の間で可視化できない魔力が空間を音もなく浸食し始める。そのプレッシャーに、榎原十六夜を含む企業の代表たちは顔色を青くした。

「ではどうする」

「この件は私が預かる、事実確認が取れるまでこの件で君らの介入を許す気はない」

「ならん、五芒星が一事件の調査に動くなど認められん」

「どの口が言うんだと言ってあげたいが、同意見だ。私も五芒星として動く気はない。」

それでいいだろう？」

「……………期限は3日だ。それ以上は認められない」

「じゃあこの話は終わりだね……………彼は連れていくよ」

「好きにしろ」

転生してから17年が経った。この島に来てからは5年が経つ。この島に来た頃は楽しかった。魔術を何のためにもなく利用できることも、魔術師が恐れられないことも、見るものすべてが新鮮でこの島は楽園に見えた。

だけど、どんどんこの島の現実が見えてきて、同時に俺の力はこの島でも規格外で、大きな犠牲を払いながら俺は五芒星になっていた。

初めは虚しかった。恩人であり憎むべき仇敵でもある彼女の代わりに座っただけのくだらない椅子。そう思っていた。すべてを笑い飛ばせるように色々なことに手を出した。美少女ボディーに入れ込んでいた俺は面白そうな男を見つけては、純情を弄ぶと

いう割と最悪な行為もしていた。

数年が経ちさらに退屈と言いい知れぬ怒りが湧きだしたところ、俺はあることを思い付いた。退屈なら、それを壊せる主人公を見つけなければいい。この緩やかに滅びに向かう島を壊せる物語を紡ごう。

そんな時に見つけたのが、『榎原十六夜』という少年だ。

俺はこの日、主人公を見つけたのだ。

第2話

雨空雫の朝は遅い。幻想島の学習カリキュラムは選択式だ。故に、時間割の調節を行いやすい。雫は現在高校2年生。1年生の時に先取りで無理やり授業を取っていた雫は、午前中の授業をすべてカットしていた。

この島には大きく分けて5個の教育機関が存在する。それぞれに小学校から大学までが存在し、一般教養はもちろんのこと魔術の知識やそれ以外の知識も学ぶことができる総合教育機関だ。ただ、それぞれに特徴はあり一般教養に力を入れている『叡相学園』、魔術の研究に力を入れている『神聖学園』、魔術の扱いに力を入れている『青海学園』、すべてを満遍なく行うことを重視した『未来学院』、そして研究と魔術の使用に重きを置いた『ロキ・アカデミー』以上の5つがこの島に存在する教育機関だ。雫は未来学院に籍を置いている学生である。

雫は未来学院に籍を置いていた。

日の光は目覚めの眼球にひどく沁みて、雫は涙目になるぼやけた視界の中に振動する携帯端末を見た。

そこには見慣れた名前がある。

「おはよう、鈴ちゃん」

『おはようございます。雫。今いいですか?』

端末をタップすると友人の声が聞こえてきた。

「榎原十六夜君についてかな?」

『……………はい、一般生徒には知られていませんが自治委員会の一部では貴方が審問会に乗り込んだ話が出回っています』

「おー、耳が早いね。流石は自治委員会」

電話の向こうにいる友人は自治委員会の長であった。自治員会は幻想島の治安維持組織である。その構成員はすべてが学生であり、学区内や生徒同士のいざこざは自治委員会が収める。

『…単刀直入に聞きますが、どういう意図ですか?今度は何を企んでいるのでしょうか』
「企んでいるのはリーグの方だよ。彼を餌に私をあそこに引つ張り出したのさ」

『わかりませんね……………事件の解決を雫にお願いしたいのであれば、五芒星に対して依頼を出せばいい』

「私もそう思う」

『ですがそうはしなかった』

「だからさ、これは簡単に難解な話なのさ。私をこの件の解決に関わらせたい理由が

リーグにはあつたけど、五芒星としては動かしなくないのさ。だから私が個人的に動くように仕向けた。彼はそのために利用されただけの哀れな被害者つてわけだ」

『……………彼をこの島に招待したのは貴方ですよね?』

「だつたら?」

『いえ、聞いただけです…』

鈴は端的に言えば、雫を疑つてた。この島で起こる事件の半分は彼女の掌だと言われるほど、裏を知る学生の間では黒い噂が有名なのだ。

「彼の無罪を三日以内に証明したい。彼を連れて行くから、とりあえず協力してくれないかな?」

『…学生の平穩を守るのが私の仕事です。目星はある程度付けておきました。昼休みに連れてきてください。今日は登校されるのでしょうか?』

「ああ、そろそろ行くよ。じゃあね」

電話を切つてから、雫は朝の用意を始める。

制服に袖を通し、パンを齧る。

雫が住んでいるのは未来学院から1Kmほど離れた高層マンションだ。このマンションの家賃は通常よりも異常に高い。なぜなら、雫が住んでいるからだ。五芒星の住んでいる地区で問題を起こすと、高確率で狙われると多くの人間が思っているからであ

る。別にそんなことはしないが、雫のマンシオンは特にそうで騒ぎを起こした学生は決闘にて血祭りに挙げられ再起不能になったというデマが流れている。誓って言うがそんなことはない。確かに、決闘で相手を血祭りに挙げたことはあるが、それはマンシオンで騒ぎを起こしたのが原因ではなく自分の命を狙ってきたテロリスト崩れだとかつていたからだ。

話を戻そう。雫の家から1キロ。遠くはないが近くもない。電車を使うにはもったいない距離であり、自転車で行くには人が多い。

そこで編み出したのが空を飛ぶ魔術だ。テレポトみたいな魔術は雫には使えない。頭の中にスパコンがないと無理だというのが通説だ。

「黒髪美少女が箒に跨って空を飛ぶ……これぞロマンだ」

雫は、マンシオンの屋上から箒と共に身を投げ出す。箒には風の魔術と浮遊の魔術を刻み込んである。作り上げるのに三年もかかった。

「起動」
オープン

落下する箒は、ふわりと浮くのみで留まり彼女の身体を乗せて安定した。それこそ、座つても落ちたりしないと言っても言いたげな安定感がある。

そのまま風を切つて空を飛び始める。

ちなみに、雫はいわゆる横乗りをしている。わかりやすく言えば箒に腰掛ける乗り

方。この乗り方こそが至高だと彼女は考えている。控えめもしくはセクシーな印象を与えやすい。ついでに足組みもできる。完璧だろう？

跨り乗りは認めない。自転車の要領で箒にまたがる最も標準的な乗り方だが、そもそもダメ。長時間の飛行は股への負担が大きいし。

「し、雫さん……………」

「お、我らが女王様のお出ましだ」

「下手に視界に入るな、消されるぞ！」

「いや、普通にしている分には大丈夫だろ」

「でも許可なく正面に立つたら殺されるって……………」

学院に到着し、校門に降り立った瞬間、向けられる畏敬と親しみと尊敬と恐怖。

その中に違った視線が混じっていることに気が付く。

「やあ、昨晚ぶりだね」

雫は、ちよつと悪戯をしようとして強化魔術と消音魔術で距離を詰める。相手の瞳を覗き込むようにして、目と目を合わせて笑う。

「お、オハヨウゴザイマス」

「何で片言？今昼休みだけだね」

そうは言いつつも、雫は自分が可愛いと自覚しているためニヤニヤしながらそれを見

ていた。性格が悪い。

「はいはいそこまでしてくださいね」

深く落ち着いた声とともにパンパンと手を打つ乾いた音が鳴り響いた。

「面倒事を増やすのはやめてください」

そう言いながら目もくらむような金髪の髪をなびかせた少女がやじ馬の中から現れた。

雫とはまた違った美しさの持ち主である。雫は妖しげな雰囲気と無邪気な子供のよ
うな雰囲気そしてミステリアスさを合わせ持つ、それに対しその少女は静かな水面みなものよ
うな深く穏やかな美しさを持ち合わせていた。

「やあ、鈴レイちゃん。迎えに来てくれたんだ」

「ええ、このままだと茶番劇で終わりそうでしたので」

二人の少女が相對する。彼女は星垣鈴。

「……………皆さんは早く教室に戻ってください。私は彼女と話がありますので」

彼女の言葉にやじ馬たちが教室に戻っていく。その様子を眺めてから、雫はにやりと
笑みをこぼすのだった。

第3話

講義室より少し狭い執務室。その部屋には現在3人の人間がいた。楨原十六夜、星垣鈴、雫の三人である。

軽い自己紹介を済ませた鈴と十六夜は席についている雫に目配せをした。

「じゃあ、鈴ちゃん。事件の概要を教えてくださいませんか？私にはなく、彼に」

「いいでしょう。昨夜未明、南西地区をランニング中の学生、鴨崎貫が何者かに襲撃されました。重傷を負わせ逃亡したと思われる犯人は、十六夜さんの顔で監視カメラに映っていた。ここまでではいいですね？」

「あ、あの……疑われてますけど、俺はやってないんです」

「鈴ちゃんも君が犯人だとは思ってないよ」

自分の無実を主張したいだろう十六夜にこの場にいる人間は敵ではないと諭す。

「顔なんて魔術でいくらでも偽造できる。数分間であれば、鈴ちゃんでも男子生徒に変化できるからね」

「……十六夜さん誤解のないように言っておきますが、姿形の偽造魔術は、視覚的なものだけです、極限の集中力が必要とされます。そのため非常に高度な魔術とされます

が、監視カメラの映像だけで犯人を特定するのはナンセンスだと我々も考えています。加えて、十六夜さんは近日この島に来た転校生。動機がありません」

鈴はそこからさらに情報を垂れ流す。

「本日未明、同様の手口で襲撃を受けた事件が2件発生しました。被害者は両方とも、この学院の女生徒です」

初耳の情報を受け、雫は目を細めた。この時点で十六夜の容疑はかなり薄れるだろう。何せその時間帯はアリバイがあるはずだからだ。

「狙われている学生には共通点がある感じ？」

「狙われている学生に共通点はありませんが犯人の目的の一つがわかりました」

十六夜は前のめりになり、雫は静かにその目的について聞かされるのを待っている。「それは魔術師の『眼』です……被害者は全員目玉をくり抜かれているのです」

口調はいつもと変わらないが、星垣鈴の声色には隠し切れない怒りがにじんでいた。自分の学園の生徒が被害者にいるからではない。雫もそうだが彼女は無差別的な犯行が嫌いだ。理不尽が嘲り笑うかのように、誰かを傷つけるのをひどく嫌う。

「……………え？被害者って生きてる？」

「ええ辛うじて、生きています。くり抜かれているのは片目ですし。鴨崎さんのお話ですと、炎魔術で襲われ、特殊な魔術で拘束。その後、じつくりと時間をかけて目玉を

くり抜かれたそうです」

想像以上にサイコパスな犯人の行動に、十六夜は何とも言えない顔をしていた。

「鴨崎君、あつたことはないけどタフなんだろうね」

目玉をくり抜かれるレベルの話だとカウンセラーがいるだろう。それにここまできな臭い犯行となると、放っておくわけにはいかない。魔術師の犯罪は、恨み以外の犯行は大抵、何かの研究のためか、より大きな計画の一步目だったりするからだ。

「…幸いと言えなくもないのが、さらなる手掛かりが舞い込んできたことです」

「本日未明、襲われた学生は2名と言いましたが目玉を抉られたのは一名だけで、もう一人は犯人を辛うじて撃退。犯人には逃げられたそうですが、背格好や性別などは記憶しているそうです」

「へえ、撃退したんだ。誰？」

「私よ」

3人しかいないはずの室内に声が響く。声の方向に振り向いた十六夜が見たのは、一人の少女であつた。

青い髪を結い上げ、首には白と青を基調としたヘッドホンを掛けている彼女は、如何にも気が強そうだ。

「紹介します。竜胆音々さんです。音々さん、こちらが転校生の十六夜君です」

「ふーん。あんたがそうなんだ。ぱつとしない男ね」

いきなりパンチの利いた挨拶をされて、十六夜の顔が引きつる。竜胆音々と呼ばれた少女はすぐに雫の方を見て、目を細めた。

「久しぶりね、雨空雫。相変わらず、いけ好かない女で安心するわ」

「……………なるほど、竜胆ちゃんか。確かに並大抵の魔術師であれば、君を襲撃するのは無理だ。停学処分明けに災難だったね」

音々の嫌味をまったく気にしていない雫は、竜胆にとつてこの上なく気に食わない相手だった。

音々は視線を切つて、鈴に問いかける。

「で、私に何をさせたいわけ？」

竜胆音々は、十六夜の冤罪の件も今回の連続襲撃事件も鈴から説明されていた。

「竜胆ちゃんにはさ、十六夜君としばらく行動を共にして欲しいんだよね。私と鈴ちゃんはデータベースと監視カメラ映像から真犯人を調べてみようと思つていてね。この島のことを説明する傍ら、君たちには被害者の鴨崎君に事件当時のことを聞いてきて欲しい。竜胆ちゃんと認識の齟齬がないかとかね」

代わりに答えたのは雫であった。

「あんたの言うことを聞いてあげる義理はないわよ？」

犯人を見て撃退した音々と犯人がスケープゴートに選んで失敗した十六夜は、襲撃されるリスクが高い人物だ。つまり、自分を囿にしようとしているのだと音々は直感していた。

「冤罪を掛けられた可哀そうな少年を見捨てるのかい？」

「あんたがそれで困るならそれでも悪くないわね」

「フフ、自分も騙せないチープな嘘をつくのは兄譲りなのかな？」

その言葉を皮切りに完全に部屋の空気が凍った。

「ッ!!」

「雫!!!」

音々が顔を歪め、鈴が雫を窘めた。状況についていけないのは、冗談のつもりで話していた雫と事情を知らない十六夜だけである。

「……………いいわよ。やればいいんですよ」

音々は感情を殺した声で依頼を受領した。申し訳なさそうにする鈴と感情のない瞳でそれらを見る雫はどこまでも対照的だった。

「すいません、音々さん。報酬の件は何といたしますので」

「行くわよ、転校生！」

「え?え?」

完璧に事態についていけない彼を引きづって少女は部屋から出ていった。

第4話

十六夜と音々は夕暮れ時の街を歩いていった。雫の言葉通り、音々は十六夜にこの島の案内をしながら一般的な常識を教えていった。

曰く、この島では魔術師としての強さを示す決闘システムや魔術に関する研究を発表するシステムがあり、それらのシステムで残した功績によってポイントが与えられる。

このポイントによって、学生はランク分けされ一番下のランクがC、上はSとなっている。平均的なランクはBであり、このランクによって受けられる島からの恩恵が変わる。Aランクともなれば、様々な施設の優先権や補助金を受けられる。

曰く、この島は研究施設や学園などが集中している学区とそれ以外の一般地区、そして五芒星が管理している特別地区に分かれるらしい。

学区内は自治委員会が存在しているため、治安が良く学区に近い場所は人気で家賃が高いらしい。特別地区は収めている五芒星によって色があるらしく、雫が収める地区は娯楽施設や落ち着ける場所が多く存在している。別の五芒星が収める場所であれば、研究所が密集している区画があったり、病院施設が隣接している区画もある。

そして最後に、音々は雨空雫について語りだした。

「あんたは雨空雫についてどう思ってる？」

「……………どうって言われても、あの状況から助けてくれた恩人としか言えない」

「それ以外は？」

「……………なんかすごい人」

「予想以上のバカさ加減に戦慄している私がいるわ」

ムツとする十六夜に音々はため息を吐く。

「竜胆さんにとつて、雨空さんはどんな人なんだ？」

「魔女」

「魔女……………？」

音々は歩くのを止め、向き直る。

「この島で起こる事件は毎年500件近くあるわ。事件の大きさはそれぞれなのけど、事件の4割はあの女の手の平だと言われているわ。私はこれをただの都市伝説だとは思わない。鈴にしても私にしてもあの女の軌跡を見てきた奴はみんなこれが真実だと疑っていない」

「何言つて……………」

「五芒星はポイント以外に特別な『何か』を認められる必要があるわ。それは『叡智』や『業』、『医術』など様々だけどあの女の司るものは『未知』よ。雨空雫は、個人で国を亡

ぼせるほどの魔術師でありながら、計略で理事会を押しさえつける頭脳を持っている。魔術の腕に至っては歴代の魔術師の中でも最強謳われる。一人の人間でありながら国家を超える危険度を孕んでいる怪物。誰もあの女を制御できない。だけど、あの女は各国への抑止力になる。それ故に、理事会はあの女を五芒星にしたの」

「……………」

十六夜には実感がなかった。どうして、目の前の少女がこれほどまでに畏怖と憎悪を雫に向けるのか。ただ一つ確かなのは、十六夜は雫のことを何も知らないということだ。そして、音々のことも。

「竜ど……………ッー」

音々に真意を聞こうとした瞬間、音々の身体は宙を舞った。

「へっ？」

強い衝撃に穿たれた。そう直感した音々は、受け身を取り体勢を立て直す。

「竜胆さん!？」

血相を変えて叫ぶ十六夜に突如強烈な電撃が襲いかかった。

「ぐ、いッ」

十六夜は雷撃にその身を焼かれた。彼は驚愕と共に意識を明滅させる。通常魔術師は、自身に『身体強化』の魔術を常時かけている。これは身体能力と強度を飛躍的に上

げるものだ。並みの魔術師であれば、銃弾やライフルの弾丸を受けても打撲程度で済む。強者であれば、戦車の攻撃すらも無傷で受け流すだろう。そんな魔術師としての生命線である魔術を十六夜は解いていた。

十六夜はその身に莫大な魔力を内包しているものの、制御がおぼつかない状態だった。それ故に、魔術の使用を控えていたのだ。

結果、中途半端な形で発動した身体強化は雷撃の直撃に耐えることができず意識を保つことで一時的に手一杯となった。

音々の視線先。彼女の瞳はただ一か所を見ている。その何もない空間から現れたのはロープを着た男だった。

音々は流れを感じていた。過去の体験から類推される勘に近い何か。それが警鐘を鳴らす。流れはそこでは止まってくれない。ロープの隙間から、垣間見える愉悦の笑み。その口角がより上がる。

「ッー」

男が十六夜に肉薄する。十六夜はその動きが見えていたが、それでも動けなかった。体は動くようになったが、躲せるはずの攻撃は恐怖によって、致命的な凶刃に変貌する。

それを防いだのは音々だった。懐から取り出した金属製の警棒で、男の振るったサバイバルナイフを防ぐ。

「怖いのなら下がってなさい！」

「あ——っ！」

「キヒッ！」

男が笑う。たった一本のナイフだというのにそこから繰り出される、凄まじい速さの攻撃。それは言い表すのであれば凶刃の嵐。金属のぶつかり合う嫌なの音が響き、音々がバランスを崩したのを見て男が強烈な斬撃を食らわせる。

辛くも音々は殺意を受け止めるも、相手の膂力を殺しきれずそのまま吹き飛ばされた。

「ぐっ!!!」

「グッ!!!」

十六夜は悲鳴を上げる身体に構わず音々に飛びつき抱きとめる、だが吹き飛ばされた勢いに押され派手な音を立てて公園の遊具に衝突した。

日が完全に落ちかけ薄暗くなった公園へそのシルエツトが近づいてくる。慌てて、十六夜は周囲を見る。自分が庇った音々にはどうやら怪我はなかったらしく安堵のため息をつく。

「どいてー！」

「ッ!!!」

十六夜は瞬時に状況を理解。音々を抱えてその場から距離を取った。接近する男の刃が十六夜たちがいた遊具を切り倒す。

「なんだ!?あのナイフ!」

「ナイフだけじゃないわ……あのロープも。襲われるまで姿を確認できなかった原因はあれね」

「あ!」

十六夜はそのことに気が付き、そして襲撃の理解した。襲撃犯は、あのロープのおかげで感知されずに音々を吹き飛ばした。十六夜たちは男を認識できている。つまり、一度認識してしまえば、姿を見れるのだろう。

「不意打ちはもうない」

音々は同じ結論にいたり、十六夜の背中を押した。

「何を?」

音々は心底邪魔だという怒りと守り切れないから離れろという心配を言葉に乗せて、罵った。

「邪魔だつて言ってるの!あたしはあいつと戦える。でもあんたは違う。怖いなら、ビビっているなら逃げなさい!邪魔なんだよ!目障りなんだよ!あたしは一人で戦える!!!」

それは悲鳴だった。単純な怒りの情ではない。もつと複雑で歪んだ衝動。それを受けて十六夜は呻き声をあげる。

それは否定しようのない事実である。十六夜は命のやり取りが怖い。相手を攻撃することが怖い。そして力を乗りこなせないのが怖い。だから、動けないのだ。

それと同時に、十六夜は確信している。彼女の言葉は自分に向けて放たれたものではない。血相を変える彼女は、おそらく誰かと自分を重ねて叫んでいるのだ。

「キヒッ」

男が音もなく音々に接近する。振るわれる凶刃は空を切るが、それは囿。本命の攻撃が右側から放たれる。音々はそれを受け損ない白い肌から鮮血が飛び散り、次の瞬間細い顎を蹴られ音々は公園の門へと吹き飛ばされた。

十六夜が駆け寄ると痛みに歪む顔を見せる音々。太ももに走る切り傷からとめどなく血が流れ出していた……。状況がより絶望的になったことで、逆に十六夜の頭を冷静にさせていた。

(逃げ出すだけならできるとこの公園ごと吹き飛ばす勢いで、あれを振るう。周囲に人はいない。今なら——)

拳を固める十六夜は自分の魔力を熾す。自分の持てる最強の一撃のために。制御など効かない無差別攻撃。十六夜が構えを取った瞬間——この場に似つかわしく

ないチリンという澄んだ鈴の音があたりに響いた。

気がつけば一人のメイド服の少女がその場に立っていた。灰橙色の髪に灰色の瞳。その顔は人形のように無表情だ。あまりに場違いな少女の存在に、ローブの男すらも一瞬固まった。

「雫の言った通り、面倒なことになってる。仕事が増えた…」

瞬間、メイドはローブの男の懐に現れそのがら空きの胴体に強烈な蹴りを放った。

「ガッ!」

ローブの男は吹き飛ばされる。

「ッ!」

鈴が転がるような声がその場に投げ出される。次の瞬間、男の目の前に少女がいた。

「おかわり、いっとこうか?」

メイド少女の拳がローブの男の胸部に押し当てられる。魔力の防護の上から強引に投打を叩き込む。男は悲鳴もなく悶絶し吹き飛んでいった。

轟音と共に土煙が舞う。土煙に交じって赤い霧のようなものが侵食していく。その様子を見た後十六夜は強烈な眠気に誘われて、意識をなくした。